

ラグビーのメッカといわれる長野県菅平は、海拔1250～1300m、南北7.5km東西9kmの高原性盆地である。人口1317人、戸数は336戸でそのうち農家戸数は152戸である。

巡検は、1990年10月26日から29日までの4日間にわたり田宮先生の御指導のもとで行われた。

この巡検の主たる目的は、農業からラグビー合宿を中心とした観光業へ移行しつつある産業と、地域の構造や住民意識との関係を考察することである。調査の方法は、事前約半年をかけて文献調査により情報を得たうえ、現地で住民の方々や農協を訪問し、聞き取り調査を行うものであった。

第一日目は、午後から全域を歩いてまわった。菅平でも東部地域は交通の便も良く、観光業が中心的で、西部地域は農業と観光業が混在している様子であった。アシやハンノキのみられる中央部の湿原も印象に残った。そして全域に点在するラグビーグラウンドが菅平の特色をビジュアルに示していた。

終わりに、菅平の北東にあるダボス山（標高1411m）にのぼった。曇りがちではあったが、眼下に町の様子が見てとれた。山の上には、さかんなスキー観光を物語るリフトが設備されていたが、ラグビーグラウンドもあって驚いた。

さて、二日目にいよいよ聞き取り調査にとりかかった。地区ごとに6つの班に分かれて、農家や民宿などを訪ね、生業形態、開業時期、開業理由、ラグビー合宿や観光開発、農業の現状についてなど、住民の方々に御協力を得つつ聞かせていただいた。私たちの班が訪ねたつばくろ地区（菅平の中の西よりの地域）では農家と民宿を数軒ずつ訪問した。その日は風雨で大変寒く、霧も出て視界がきかなくなったりした。初めての聞き取り調査に多少緊張し、質問も時につかえたり、とまどったりしたが、応じてくださった方々は親切に、丁寧に答えてくださった。夕方、宿泊先である筑波大学菅平高原実験センターに戻って成果を報告しあった。

三日日にも聞き取り調査を続けた。今度は快晴で

割に暖かかった。

調査では、観光開発の問題点として、スキー場造成で山が削られるため、鉄砲水ができるようになったこと、芝生を植えていないラグビーグラウンドから土ぼこりがあがることなど、自然環境に関することのほか、観光客の節度のないふるまいに、迷惑し、警戒するようになった、など住民の生活意識に関わることも聞かれた。また、農業の後継者問題から民宿経営を始めた人、数年続いた野菜の低価格により、転業を決めた人などがいて農業の将来性や安定性の問題を察することができた。観光業に対しては、現状のままでもよい、大手資本の介入やこれ以上の開発は望ましくない、とする人が多いようだった（しかし東部と西部では意見に差があり、観光業の中心的な東部は、開発に積極的な声が多かったようである。もっとも、調査対象の選びかたや数を考慮しなければならないが）。

四日日には午前中に全員で農協を訪問し、菅平の現況について役員の方のお話をうかがった後、現地で解散した。

東京に戻ってから、各自の調査内容の報告を行った結果、菅平の中でも東部と西部では観光業に対する意識やとりくみかたなど、いくつかの面で相違がありそうなことに気付いた。また、今後観光業を中心として菅平が発展していくためには農業との共存のための上手な土地利用、インフラストラクチャーの充実、住民が共通の意識のもとに観光開発をコントロールし、地元利益をもたらしていくことなど、課題もありそうだ。

今回の巡検で、事前の調査のしかたと大切さを学び、聞き取り調査では特に下準備と細かい配慮が必要なことがわかった。また、サンプルのとりかた、まとめかたにも勉強の必要を感じた。この経験を生かして卒業論文にとりくめたら、と思う。

最後になったが田宮先生、筑波大学の山下先生、ご協力下さった菅平の方々にお礼を申し上げたい。

(10月26～29日田宮教官指導)